

# 創学舎ニユース

No.228

## 燃えろ！ 受験生！

今年もあと一ヶ月を残すのみ。年が明ければ、一月中旬には、入試が始まる。中学生は茨城・千葉の私立高校入試、高校生はセンター試験。つまり、本番まで、あと五十日もないというところだ。さあ、みなさん。毎日、大切に過ごしていますか？勉強は順調ですか？

さて、私は今年度、高校生のみを担当しているが、表情が思わしくない生徒もかなりいる。また、中学部の様子をきくと、例年のことだがまだ態勢が整っていない生徒が相当数いるらしい。残念である。心配である。申し訳ない気持ちでもある。何とかしなければ……。

そこで、順調にきている人もそうでない人も含めて、アドバイス。

受験の苦しさから逃れる方法が二つだけある。一つは、受験しないこと。もう一つは、何の努力もしないで合格できる所に進学すること。どうだい？勉強がイヤだとか、受験が大変だとかいっているキミ。この二つのうちのどちらかを選べばいいじゃないか？

目標を持たないことは、自分への裏切りだ。のどちらかを選べるとしても、実は、キミ達は納得しないだろう。そうなんだ。キミ達はほ

やきながらも、本当のところ「目標に向かって進む人間でありたい」と思っているのだ。そして、「楽をしたい」とか「さぼりたい」という気持ち(これを気分という)よりずっと深い所で、「目標を達成すること」を願っているのだ。これを願望とよぶ。人間は願望(その年齢に応じた適切な願望)を裏切ると不快に、不幸になる生き物なのだ。

気分ではなく、願望に従って行動する。「勉強したくない」といってさぼるのは簡単である。しかし、さぼり続ける受験生はどんどん表情が悪くなる。さぼったあと、いつも自己嫌悪におそわれる。言動が荒れる生徒もいる。「勉強したくない」という気分が流されて、「目標を達成したい」という願望を裏切っているからである。気分は裏切つてよい。しかし願望を裏切つてはいけない。のぞましい願望に向かって毎日過ごせるようになること。これを「成長」という。

不安は絶対に消えない。目標高き時、必ず不安も共にある。これは、人間不変の真理だ。例えば、部活の試合で、相手が明らかに弱小であるとき、対戦することに何の不安もないだろう。ところが、相手が強敵で勝つかどうか分からない時は、当然不安になる。勝ちたいと思えば思うほど不安になる(いっそ、相手が日本一といくらレベルであれば、いい試合をしようぶらしいの気持ちになれるのに)。目標に向かうと

いうことは、常にこういふことなのだ。不安は絶対に消えないのだ。では、不安に負けそうになっているキミ。もう負けてしまっているキミ。どうしたらいいの？

不安を大きくしなければ生きられる。決して消えることのない不安であるが、付き合い方が一つだけある。それは、不安を大きくしないようにすることだ。不安が大きくならないように戦っていく。目標に向かって今日を生きっていく。

不安を大きくしないためには、願望を大事にし、やるべきことをきちんと続ける。これが不安と付き合っていく唯一の方法だ。願望と不安は、表と裏の関係なので、表にあたる願望を毎日思い出し、「やるべきこと」という栄養を与え続けなければならない。不安を消そうとしてはいけない。「不安を抱えつつやるべきことをやる」これが唯一の望ましい在り方だ。

心配性のキミ、傷つきやすいキミは行動で自分を支える。人間はやっかいな生き物で、ちょっとしたことで傷ついたりする。他人から言われたひと言が耳から離れなかったりする。また、親が過敏で幼稚だったりすると、子供はその不安が増幅されてパニックになったりもする。そういうことを何度も何度も経験しているキミ。このままでは一生くり返していくことになる。提案。イヤ、命令である。心配になったと

き、傷ついたとき、即行動しろ。毎日の生活でイヤな気持ちになったら、すぐシャワーを浴びる。そうすれば、イヤな気分はとんで、自分の願望と向き合えるようになる。弱気になったら志望校を見に行く。家から近いときは、毎日行つてもよい。5分お祈りをして帰ってくるだけでよい。軟弱泣き虫高慢さぼり屋のA子さんには、毎日志望校を見に行つて、目標に向かう努力屋に変身した。毎日見に行くうちに、「この学校に合格したい」が「自分はこの学校に入ることになっていく」に変わったらしい。大学受験生は距離が遠いので、時間のロスが気になるかもしれないが、往復の電車の中は、暗記物がやれるわけだし、実質的なロスは一〜二時間で済む。週に一回見に行くだけでも随分と変わるものだが、朝八時に家を出て、昼頃には帰宅して勉強に入れるようになること。

学力も得点力も入試当日の朝まで伸びる。きちんとしたやり方で勉強を続けられ、学力は着実につく。だから、やり続けること。一方で、得点力は学力より分かりづらい。勉強しているのに、模試の点が伸びないと悲しくなる。でもあきらめる必要は全くない。つまり、得点をずる力というのは、学力がついたあと模試や入試問題を前にして全力をあげて戦う中でゆっくりと身につけてくるものなのだ。

以上だ。新しい自分に会うために、勇気を出

せ。燃えろ。(小林)

### 教育「名言」紹介(3)

だれであれ、まじめに事物の真理を探究しようとするならば、たがいに他に依存しているからである。

出典 ルネ・デカルト フランス、一五九六

一六五〇『精神指導の規則』

解説 「く普通に考えるなら、ほとんどの人間は、すべての技能はおろか、複数の技能に通じることも困難だから、ただ一つの技能に秀でることを目指すべきである。これと同じことは科学(学問)についても言えるはずである。実際に、数学専攻の大学教授になると同時に、文学専攻の大学教授になることはほとんど不可能である。現実に制度上認められた学者になるためには、ただ一つの学問分野を専攻するほかに、い。

しかし、近代哲学の創始者とみなされてきたデカルトによれば、このように私たちが信じ込んでいるのは、愚かにも私たちが「学問」と「芸」を区別せずに混同しているからである、ということになる。「学問」は、もっぱら「精神」(知性)の働きである認識によって成り立つ営みであり、「芸」は、身体の一定の活動や素質を必要とする営みである。「学問」を成り立たせる

「精神」は、太陽が自分の照らす多様な事実から何の区別も課せられないように、分析対象である多様な事物から何の区別も課せられない。

「精神」は本質的に自由であり、身体のように学ぶべき内容によって拘束されたりしないのである。もしも、一つの学問分野の中に「精神」が閉じ込められれば、その「精神」は本来の力を失い、自家撞着に陥るだろう。「精神」は諸学を生み出し、諸学はその中に理性(良識)の片鱗をきらめかせる。一つの学問ではなくすべての学問を学ばなければならないのは、理性の輝きが分散しているからである。つまり、見出しの言葉に込められたデカルトの意図は、人間に内在する神性としての理性(良識)の賛美である。また、現在の学問のありように対する根本的な批判にもなり得る。現在、学問分野は細かく専門分化しているが、そうした専門分野を総合する場が存在しない。

そして、「役に立たない学問はいらない」という考え方は、現代学問論の一つの底流である。しかし、それは何の役に立たないのか。たかだかこの現代社会の秩序を維持する上で役に立たないだけではないか。社会問題、政治問題、経済問題に対する対処療法を開発する上で役に立たないだけではないか。そして、こうした反問は、ほかならぬ「学問」的な精神から提出されるのである。(アガトス教育研究所)

### 教室授業でのルールマナー

他の緩みも生み、だんだん勉強に向かう気持ちが弱くなってくる。

創学舎では現在、教室に『教室・授業でのルール・マナー』という表を掲示している。入塾時の面談にてご家庭にも一部配布済みである。このルール・マナーの表はその後どうされているであろうか?面談後にご家庭で目を通され話し合われているだろうか。それとも、どこかにしまわれているだろうか。

ここで、できればその表を引っ張り出してきた、もう一度見ていただきたい。どのようなことが書かれているだろうか。様々なことが書かれているが、よく読んでみて変なことが書かれているであろうか。いなはずである。我々としても、みな塾に来て効率よく、そして落着いて知識を身に付けるために必要だと思われることを書いていたのである。

なぜこのような話をするかというと、読んで当たり前だと思われることが、実際にはなかなか実行できないことも多いからである。例えば、ほおづえをつかない。であるが、勉強の意欲が低下する。たかがほおづえと思われ方もいらつしやるかもしれないが、授業に出て真剣に教師の話を聞くことが、ほおづえをついていると姿勢が悪くなるし、気持ちも緩んでくる。些細なことであるが、その気持ちの緩みが

そのそも勉強はしたほうが良いと分かっているにもかかわらず、自分から積極的にできないものである。そこで塾に来ればそのときは(半ば強制的にでも)勉強させてもらえる。せつかくそんな思いをして塾に来ているのに、そこで無駄な時間を過ごしてはもったいないではないか。その時間を大切に、そして有効に使っためのルールだと思っただけであればありがたい。

またもう一つの観点として、生徒諸君がこれから成長して社会に出て行くときに様々な人間関係が発生する。そのとき、人間として当たり前のマナーを身に付けておく必要がある。そのような思いもある。塾であるから勉強はできるよになってもらいたい。しかし、その前に「これから生きていくうえで必要となる立ち居振る舞いを身に付けておくことも非常に大切である。そのようなことをせつかく来てくれている生徒達に身に付けてもらうことは、われわれ教師としての役目の一つと考える。

これからは細かいことであれこれアドバイスや注意をすることだろう。それも君達によかれと思っただけのことである。ぜひ心に留め、取り入れてくれれば幸いである。(松永)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば創学舎ユニフォームを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。